

星を見上げる夜はあなたと

## 目次

星を見上げる夜はあなたと	5
夏の星図に誓いの言葉	163
Sunny Day	261

星を見上げる夜はあなたと

幼いときから、夜空を見上げればいつでもそこに満天の星があった。漆黒の闇に瞬く無数の星。ずっと見ている見飽きない、永遠の輝き。その空が、当たり前だと思っていた、少女のころのわたし。見えないことの寂しさに気づいた、大人になったわたし。

重たい鞆と、商品サンプルがぎっしりと詰まった紙袋を両手に持つての外回り。会社に戻ったときにはすっかり疲れ果てていた。自分の机の上にドンと音を立てて荷物を置くと、隣の席から低い笑い声が聞こえる。

「すごい顔してるぞ、宮崎」

芸能人も顔負けの驚くほど整った顔に嫌味な笑みを浮かべ、同僚の伊勢谷が言った。

「疲れてるんだから仕方ないでしょ」

ギョリと睨んで答えると、伊勢谷がまた爽やかに笑う。わたしと同じように、一日中外回りをしていたはずなのに、まったく疲れた顔をしていない。それが余計にムカつく。

「もう若くないんだから無理するなよ」

「うるさいわね、ほっときなさいよ。あんただって同い年でしょ！」

伊勢谷の笑い声にイラツとしながら、鞆と紙袋の中身を整理し、椅子に座ってパソコンを立ち上げた。肩と首を回し、軽くストレッチをしてからキーボードを叩く。

宮崎奈央、二十八歳。

東京に出て来て早十年。大学卒業後、日用雑貨や衣類を製作販売する会社に入社し、以来営業部で忙しい日々を過ごしている。

実家は、瀬戸内海にある島だ。そこで民宿を経営している。四歳年上の兄が、会社勤めをしながら義姉とともに両親を手伝っていた。義姉は兄の同級生で、わたしとも子どものころからの顔見知りだ。

島の中で、わたしは常に優等生だった。せっかく勉強ができるのだからと、両親はわたしを高校卒業後、東京の大学に進学させてくれた。

意気揚々とおり立った都会で、わたしは初めて挫折を知った。島の中では一番でも、都会にでてみると、わたしも人ごみの一構成員に過ぎなかったからだ。

同じ大学なのだから、学力はそう変わらない。それならと、遊び回っている同級生たちを横目に必死で勉強をしても、それほど差は開かない。

現実を突きつけられた。井の中の蛙、大海を知る――

プライドが変に高くて勝手に傷つき、凹んで、それでもこの都会で就職することを決めた。今度

こそトップに立ってやると、わたしの負けず嫌いな性格がそうさせたのだ。今思えば、おとなしく地元に戻った方がよかったのかもしれないけれど……

「なーおー！」

突然呼ばれた声と同時に、背中から抱きつかれた。

「うげーっ」

「……すつげー声だな、おい」

思わず呻き声を上げると、隣の席から伊勢谷が呆れたように言った。けれど、苦しくてそれどころではない。

息ができない！と慌てて振りほどくと、同期で友人の遠藤一美が立っていた。ちなみに彼女は総務部所属だ。

「苦しいじゃない！」

喉を押さえたわたしを見て、一美があっけらかんと笑う。

「ごめんって。だって、声をかけたけど聞こえてないみたいだったんだもん」

悪びれることなくそう言って、空いた椅子を持って来てわたしと伊勢谷の間に座った。

「ねーねー、今夜合コン来てくれない？ 一人足りなくってさ」

「行かない。合コンなんて嫌いだし、ましてや数合わせなんて、もつと嫌」

きつぱりそう答え、パソコンに向き直る。さっきの衝撃でタイプミスした部分を削除する。

「言うと思っただけさー。あんたの飲み会嫌いは知ってるし」

気分を害した風もなく一美が笑う。知ってるなら誘わないで欲しい。

「でも今日の相手は商社マンよ。チャンスチャンス」

「なんのチャンスよ。そんなことより早く帰って寝たいわよ」

「いらんと言いながら、キーボードを叩く。」

「もー、色気ないわねえ。もつと人生を楽しみなさいよー」

一美が椅子に座ったまま、ぐいぐい来るけど無視する。言われている意味はわからなくもない。恋愛事から遠ざかって、もう何年になるんだか。でも、仕事がハードすぎて、色恋に回せる気力がないのだ。

「遠藤、あんまり言うなよ」

ふいに伊勢谷が口を挟んだ。手を止め、一美と一緒に彼を見る。すると、随分と楽しそうな顔をしていた伊勢谷が、妙に真面目な表情になった。

「宮崎はもう歳なんだよ、疲れてるんだから休ませてやれよ。からだは労らないと」

「だからあんたも同じ年でしょ！」

食い気味に文句を言うと、頷いた一美が伊勢谷をビシッと指さす。

「そうよ、わたしたちがおばさんなら、あんたはおっさんよ！」

「誰もそこまで言っていないだろ」

呆れ顔の伊勢谷を無視して、一美が立ち上がる。

「もういいわ。じゃあ、また今度飲みに行こうね」

わたしの肩をぽんと叩いて、彼女は営業部から出て行った。

「あいつの耳、どこかおかしいんじゃないのか？」

伊勢谷がやれやれ、という調子で言った。そこはまあ顔けなくもない。彼女はいつでも前を向いて走っている感じだ。その裏表のない性格はつきあいやすく、今ではわたしにとって、唯一の友人でもある。

「今のはあんたが悪いの！」

「本当のことなのに……おわつ、いてっ」

脚を伸ばして伊勢谷の椅子を蹴ってやった。伊勢谷が椅子から落ちそうになったのを見て、べーっ  
と舌をだす。

「お前、危ないだろっ」

「さー、仕事仕事」

怒る伊勢谷を無視して、パソコンに向き直った。

終業時間をだいぶ過ぎて、ようやく仕事が終わった。なぜか同じタイミングで伊勢谷も帰り支度をはじめ、どういうわけか二人で駅まで歩くことになった。

秋が終わりに近づき、外は冬の空気を纏いはじめている。夜ともなればすっかり冷え込んでいた。わたしは小さく身震いして、ジャケットの前をぎゅっと握る。そして、わたしよりも二十センチほど背の高い伊勢谷をちらりと見た。

伊勢谷と一緒にいると、なんとなく落ちつかない。息を呑むほどの見た目のよさのせいか、あら

ゆる人間の視線がヤツに集まっているのを目の当たりにするせいか。はたまた営業部に配属されて以来、常に成績トップに君臨し続けているヤツを羨んでいるためか。

どちらにせよ、居心地が悪いことは確かだった。そんなわたしの思惑など知らないとはかりに、伊勢谷はわたしを構って来る。同期の気安さだろうか。

「今週も疲れたな」

疲れなんて微塵も感じさせない表情で伊勢谷が言う。

「そうね」

こっちはもう本当にガタガタよ。脚が浮腫んでパンパンになっているので、一刻も早く家に帰って靴を脱ぎたい。いや、今すぐ脱ぎたい。

駅までの道は、大勢の人が行き交っている。ふと見上げると、ビルの間から夜空が見えた。都会の明かりに照らされたそこには、星ひとつない。——だから東京の空は嫌いだ。

見えない星空に、息を吐く。そのとき視界の端に伊勢谷の顔が見えた。ヤツはわたしを見て笑っている。

「なによ？」

「いや。相変わらずだなと思って」

なにもかも見透かしたような表情に、伊勢谷が完璧な男だということを感じ出した。外見も内面も、そして記憶力も、彼は完璧なのだ。

伊勢谷という人間は完全体で、そしてそれは、わたしが望んでいた姿そのもの。だからわたしは、

伊勢谷が嫌いだ。

駅の改札で伊勢谷と別れ、週末の混んだ電車に乗り込んだ。座席とドアの角にある空間にからだを滑り込ませ、ため息をついて目を閉じる。頭の中にさっきの伊勢谷の顔が浮かび、過去の記憶が蘇って来た。

今から六年前、新入社員のわたしが希望した部署は、営業部だった。目に見えて成績がわかるし、小さなころから民宿の手伝いをしてきたから、人と接する仕事は得意だ。

自分で言うのもなんだけど、見た目だってそんなに悪くない。昔から才色兼備な宮崎奈央として通っているのだ、なんてね。

目はぼつちり二重。鼻は高からず低からず。唇の形だって悪くない。普段はまとめている髪の毛は、セミロングの長さをキープ。背は百六十センチを少し超えたくらいだ。まあ、取りたてて武器になるものがないと言えなくもないけれど、弱点らしき弱点はない。

新入社員は数人のグループにわかれ、二週間の研修の後、それぞれの部署に配属されることになっていた。花の営業部に配属されたあかつきには、誰にも負けにくいくらい優秀な成績を取ってやるという意気込んでいたそこで、わたしは星の名前を持つ男に出会った。

「今日から二週間、よろしく」

端正な顔で屈託なく笑ったその男こそ、伊勢谷昂だったのだ。

くつきりとした二重の切れ長の目、すつと通った鼻すじと薄い唇が完璧なバランスで配置されて

いる。名前の通りきらびやかで、十数人いる新入社員の中でも——いや、社内でも、飛びぬけて整った顔をしていた。大勢の女子社員があらさまに彼に見惚れ、誰もが素敵な人だと思っただろう。わたしだって最初はそう思った。

「同じ班になったよしみだ。仲良くやろうぜ」

端正な顔に似合わない少し砕けた口調に、人懐っこい笑顔。それがさらに彼の魅力を増していた。けれど、そのほのかな想いが嫉妬に変わるまで、そう時間はかからなかった。

伊勢谷は、新人研修でなにをやらせてもそつなくこなした。企画、衣服のたたみ方に商品の梱包、どれをとっても、伊勢谷にできないものはなかった。

同じ班になったわたしも必死に頑張つて、高評価をもらった。でも伊勢谷はいつも、わたしの一歩前にいた。

「よし、完璧！」

プレゼントの梱包練習。仕上がりに満足して、上司のOKもでたのに——

「いいな、それ。で、もうちょっとこうすれば……」

伊勢谷が少しじつただけで、さらに華やかになった。上司もびつくりだ。一事が万事、そんな感じ。でも、彼はいつも言うのだ。憎らしいくらいの笑みを浮かべて、

「すごいな、宮崎」

と。

嫌味でもなんでもなく、伊勢谷はただ純粹に感嘆の声を上げる。できることを鼻にかけるわけで

もなく、謙遜するわけでもない。誰かが失敗しそうになったときにはさりげなくフォローし、見事な結果を導きます。そして伊勢谷はみんなに一目置かれ、尊敬され、憧れのまなざしを向けられるようになっていた。

わたしが望んでいたものすべてを、伊勢谷昂は持っていた。それも、わたしよりもずっとずっと優れた形で。

伊勢谷は一番星だ。暮れかけた空に、一番最初にキラキラ輝く明るい星。その光は強すぎて、わたしの光なんてかき消されてしまいそう。

でも、違う部署になれば、わたしが一番星になる可能性はまだあるはず。

なんて、強気だか弱気だかわからない決意を、神様がまともに取り合ってくれるはずもなかった。新人研修が終わった翌週、わたしと伊勢谷は同じ営業部に配属になった。同期の女子には羨ましがられたけれど、正直代わって欲しいくらいだ。確かにわたしは、営業にいきたくないとずっと望んでいた。でもそれは、伊勢谷の存在を知らなかったときの話。

「よろしくな、宮崎」

営業部で机を並べ、伊勢谷が笑った。完璧な笑顔だ。それが驚くほど眩しく、わたしはなにも言えなかった。

伊勢谷には、当時の営業成績トップだった先輩が指導担当についていた。それはつまり、会社からかなり期待されているということ。わたしを教えてくれた先輩も優秀な人ではあったけれど、トップではない。出だしから伊勢谷に先を越された。

正直ものすごく悔しかった。だから、わたしはそのとき、伊勢谷に勝つために努力を惜しまないとか密かに決意したのだ。伊勢谷を一方的にライバル認定した瞬間だった。

先輩とともにいきいきと動き回る伊勢谷を視界の端にとらえながらも、わたしも必死になって仕事を覚えた。

「すごいな、宮崎。女性の新人でここまでできるヤツはめったにいないぞー」

「ありがとうございます、先輩！」

おかげで、上司からも先輩からも一目置かれるくらい成長することができた。でも、伊勢谷はわたしのさらに上にいた。

「伊勢谷が契約取ったって！」

「新人が単独で契約を取るなんて初めてじゃないか!？」

あのときの騒ぎは今でもよく覚えている。

わたしとは格が違う、優秀な伊勢谷——。それでも、わたしはなんとしても一番上に立ちたかった。そのためにはもっと努力しなければ、と思っただけのものだ。

ちなみに、その努力は六年経った現在も絶賛継続中だ。おかげで常にいい成績を取り続けているけれど、やっぱり伊勢谷には及ばないのだ。

「ああ、やだよだ」

ため息をつきながら最寄り駅であり、駅前のコンビニに寄ってから帰宅する。帰り道、自然と見上げた空には、星がひとつだけ見えた。



わたしの実家の前には、海がある。夜になると、海と空の境界線もわからない、漆黒の闇が広がる。空にはいつでも満天の星。数えきれないほどの星が、ちりばめられた宝石のように闇の中で輝くのだ。吸い込まれそうなその星空をずっと眺めることが、わたしの至福の時間だった。

何光年、何光年彼方から届くわずかな光。それを見ながら、何度宇宙の果てに思いをはせたことか。そのころの気持ちだが、まだわたしの中に残っているのだろう。何年も宇宙空間をさま迷っていた小型探査機の帰還ニュースに感激し、大気圏で燃え尽きる映像を見て涙してしまった。でも、それは誰にも内緒だ。バリバリ仕事をこなすキャリアウーマンとみなされているわたしに、そんな弱いイメージは不要なのだ。浮いた話ひとつなく、強気で仕事にしか興味が無いと思われている——それが今のわたしなんだから。

## 2

休日是用事がない限り、朝寝坊すると決めている。一週間の疲れは一晩寝たくらいでは取れない。しかもその疲労の蓄積感は、年々顕著になっていった。伊勢谷に言われるとムカつくけれど、やっばり年齢のせいなのかもしれない。二十代後半でこれでは、この先のことを考えようすら寒くなってくる。

なんとか布団から起き上がり、すでに明るい部屋の中を見回した。1Kの部屋に家具類はあまり。休日は用事がない限り、朝寝坊すると決めている。一週間の疲れは一晩寝たくらいでは取れない。しかもその疲労の蓄積感は、年々顕著になっていった。伊勢谷に言われるとムカつくけれど、やっばり年齢のせいなのかもしれない。二十代後半でこれでは、この先のことを考えようすら寒くなってくる。

なく、まあまあ片づいている。散らかるほど部屋にいないからだ。

「今日は掃除はしなくてもいいかな」

一人つぶやき、部屋の隅にまとめていた洗濯物をかき集め、洗濯機を回す。その間に朝食用に買ったサンドイッチを食べ、こたつに入ってぼーっとテレビを眺めた。

東京に住んでもう十年になるのに、テレビや雑誌で見るような、おしゃれで都会的な生活を送ってはいない。恋人がいたころは多少違っていたけれど、それも短い時間だ。残念ながら、一人の時間の方が遥かに長いのが現実。

洗濯物を外に干し、一息ついたところでインターホンが鳴った。実家から大きくて重い荷物が届いたのだ。

「ありがたや、ありがたや」

そう言って段ボールを開けると、一番上に封筒が乗っていた。それを一旦こたつの上に置き、その下にある沢山のビニール袋を開ける。中に入っていたのは、お米、お味噌、海苔と佃煮、タマネギとにんじんとじゃがいも。それから、なんだかオバサンっぽい肌着。これは母が通販で買っているものだ。一二月月に一度届くおなじみのラインナップは、都会で一人暮らしをしている身には有難い仕送りだ。

食料品を片づけ、肌着はクローゼットの中の衣装ケースに仕舞う。ついでにお湯を沸かして、温かいお茶を淹れた。十一月ともなると、部屋の中でも結構冷える。

こたつに入り、除けておいた封筒を開けた。中にはさらに封筒が二通入っていた。一通は母から

の手紙だ。内容は毎度変わりない。向こうの近況、こちらの様子を伺う言葉、そして、頑張ってる文字。

もうひとつの封筒には、兄夫婦の子どもたちの写真が入っていた。甥の哲弥が七歳、姪の千香が五歳。二人とも先月が誕生日だったので、プレゼントを贈ったのだが、そのお礼らしい。

「ふふ、可愛い」

おもちゃを前に満面の笑みを浮かべる二人の顔に、うれしくなる。手紙を開くと、拙い文字が並んでいた。そこにも「おしごとがんばって」という言葉を見つける。

その言葉はわたしにとって、時々とても重たい。

「ちゃんと頑張ってるってば」

ため息をつき、お茶を一口飲んでスマートフォンを手に取る。アドレス帳から実家の番号を探してタップすると、しばらくして母の声が聞こえた。

「あ、お母さん。奈央やけど」

普段は一切でない土地の言葉が、すらりと口から出て来る。

『奈央、元氣？ 荷物届いた？』

「うん、ちゃんと届いたよ。いつもありがとう。哲と千香にもお礼言つといて」

『わかった。だいぶ寒なつて来たから、ちゃんと温かくするんよ』

「うん」

『仕事は？ 営業うんは忙しいんやろ？』

「まあね」

『無理せんと頑張りや。でもほんま、お母さん誇らしいわ。この前もお客さんに、娘が東京の大学をでて東京で働いてるって言うたら、すごいすねえって言われたんよ』

「そう」

母の声は、いつも通りうれしそうだった。母の中でわたしは、誰にも負けない優秀な娘のままなのだ。

でもね、お母さん。そんな人間、東京には数え切れなくらいいるのよ。

喉まででかかった言葉を呑み込み、当たり前障りのない会話をして電話を終えると、一気に疲れが押し寄せた。

実家の家族を懐かしく思わないときはない。荷物が届けばありがたいし、声を聞けばうれしい。それでも、かけられた期待の大きさに、時々押しつぶされそうになる。

お母さん。残念ながらあなたの娘は、それほど優秀ではないのです。本当に優秀というのは、あの男のような人のことをいうのだから。

外見も性格も頭脳も、なにかも完璧な伊勢谷。同期の中で一番近い位置にいて、誰よりもわたしの劣等感を刺激する男。そして、わたしの密かな趣味でさえ、ヤツは知っている。

それを思い出すと、いつも胸がざわつく。弱みを握られているような感覚になるのだ。

「あーやだやだ。せっかくの休日にこんなに暗くなるなんて。買い物にでも行こうつと」

気持ちを切りかえるため、勢いよく立ち上がり、コートを羽織った。

伊勢谷にわたしの趣味を知られたのは、配属から二週間後の週末に行われた、営業部の新人歓迎会のときだった。

みんなで居酒屋に移動する途中、ふと空を見上げた。空を見るのは、わたしの癖のようなものだ。都会のビル群の間から見える夜空は本当にわずかで、どんなに目を凝らしても星ひとつ見えない。本当なら、無数の星々がそこにあるはずなのに。

「なにを見てんだ？」

そのとき、いつの間にかわたしの隣を歩いていた伊勢谷が言った。痛くなるほど空を見上げていた首を戻し、背の高い伊勢谷に視線を合わせる。

朝は軽く整えられていた髪が、今は少し崩れている。それでも、伊勢谷の男前が損なわれることはない。天は二物を与えずなんて嘘だということを、この男は体現していた。こんな伊勢谷だけど、現在恋人はいない。そんなこと興味なかったけど、女子社員の間で伊勢谷の話題が絶えなかったのだ、勝手に耳に入って来たのだ。

「星よ。でも見えないの」

そう答えたわたしに伊勢谷がなにか言おうとしたとき、目的の店に到着した。そのまま押されるように店に入り、新人だからと伊勢谷と二人で上司の近くに座らされた。

大学時代は、バイトと勉強に明け暮れていたから、大勢の飲み会の経験はほとんどない。先輩たちと緊張しながらも和気藹々と話し、勧められるままにお酒を飲んでいたらすっかり酔いが回ってしまった。

しまった。

最初は意識していた隣の伊勢谷が気にならなくなったころ、その伊勢谷がわたしに話しかけて来た。

「さっきの続きだけどさ」

「えっ？」

賑やかな声に紛れてよく聞こえない。頭を少しだけ伊勢谷に寄せる。

「星のこと。興味があるのか？」

伊勢谷も同じように頭を寄せたので、髪のがが触れ合った。ドキッとしてしまったのは、きっとお酒のせいには違いない。

「見るのが、好きだけ」

なんとなく、癒やされているとは言いたくなかった。あの懐かしい星空にいつでも焦がれていることは、この同期には知られたくないと思ったのだ。伊勢谷の前で弱音を吐くことになる気がして――

「意外だな」

伊勢谷が面白そうに笑う。詳しく言わなくてよかったと思いつつ、なんだか少しカチンと来た。意外ってなによ、意外って。わたしのこと、なにも知らないくせに。

「東京の空は、星が全然見えないからつまらないわ」

お酒の勢いもあってヤケになって答えると、伊勢谷がまたクスツと笑った。

「宮崎、出身はどこ？」

瀬戸内の島の名を答えると、彼はふむと頷いた。

「なら、物足りないだろうな」

そう、物足りない。心の中で頷き、グラスに半分入ったビールをじっと見つめる。

「プラネタリウムに行ったことがあるか？」

伊勢谷がふと言った。顔を上げてヤツの顔を見る。

「東京は本物の星はあんまり見えないけど、プラネタリウムは結構あちこちにあるんだ。行ったことは？」

もちろんないし、今の今までそんな発想もなかった。ふるふると首を振り、出会って初めて伊勢谷に感謝した。

そうだ、プラネタリウムなら本物じゃないけど星が見れるじゃないか。どうして今まで気づかなかったのか、自分で自分を責めたくなった。早速調べてみようと思ったそのとき――

「じゃあ、いつそ二人で天文部でも作るか。星を見る会あひ っていうのもいいかな」

「……えっ、なんで二人？」

一瞬胸がドキッとした。

驚いているわたしに、伊勢谷が笑いかける。

「一人で見るより楽しいだろ」

思わず息を呑むほど眩まぶしい笑顔を向けられ、とっさに言葉がでなかった。

「待ってるよ、色々計画してやるから」

「いやいや、そっちが待ちなさいよ」

言いかけたわたしを、伊勢谷が制する。

「まあまあ、任せとけて」

「え、待ってよー！」

反論する間を与えず、伊勢谷はさっさと向きを変えて上司や先輩たちとまた盛り上がりはじめってしまった。残されたわたしは、一人悶々とする。

そのあと伊勢谷との会話はなま飲み会が終わり、ふらふらと当時住んでいたワンルームのアパートに帰った。布団に入ったときには釈然としなかったけれど、翌日ガンガン鳴る頭を抱えながら振り返ると、あれは酔っ払いの戯言はざげんに違いないと思えて来た。日曜日になんか確信に変わり、月曜日には、そんな話があったことさえ忘れてわたしは出勤した。ところが、そんなわたしの顔を見るなり、伊勢谷が言ったのだ。

「金曜日の夜、空けとけよ」

「え、なんで？」

「星を見る会あひ、第一回目の活動だから」

「は？」

「ちゃんと定時に終わるように調整しろよー」

啞然あざんとしているわたしを残し、伊勢谷はさっさと外回りに行ってしまった。

その週はわたしも伊勢谷も忙しくて、日中は全然会社にいなかった。同じ部署とはいえ、ゆっくり話すところではない。結局、伊勢谷とほとんど話せないまま当日を迎えることになった。

「ほら、行くぞ宮崎」

終業時間を過ぎ、わたしがようやく報告書を書き終えたタイミングで伊勢谷が言った。当たり前前のことを告げるようなあっさりした口調に、思わずばかんとする。そんなわたしに、伊勢谷が呆れた顔を向けた。

「おい、記念すべき活動開始日を忘れたのかよ」

「わ、忘れてないわよっ」

ちよつとムカついて言い返す。悔しいけど、実は結構楽しみにしてたのだ。だって、久しぶりに沢山の星が見られるんだから。伊勢谷と一緒にというのがまだ解せないけど、大学と今の職場と自宅付近しか知らないのもので、いい案内係だと思いうことにした。

家に帰るのは違う電車に乗り、週末で混雑する駅でおりました。都会の繁華街を二人で歩く。

「どこに行くの？」

「一番メジャーなところ」

そう言いながら、伊勢谷が大きなビルの中にあるエレベーターに乗り込んだ。

「こんな時間までやってるの？」

「最終は夜の九時だ。先にチケットを買って、飯でも食うか。腹減ったし」

直通のエレベーターはあつという間に屋上に着いた。おりたら目の前に水族館があつて、さらに

驚く。

「宮崎、こつち」

振り返ると、伊勢谷がプラネタリウムのチケットブースの前で手招きしている。慌てて彼に駆け寄った。

「時間、どうする？ 飯食いたいから、八時のでいいか？」

今が十八時過ぎだから、そんなもんだらう。頷くと、伊勢谷が窓口に向かった。

「あ、お金」

お財布をだそうとしたら、伊勢谷が手を振った。

「いいって。記念すべき一回目なんだから。部長の俺がだしてやる」

……部長って。

「あ、ありがと」

窓口で揉めるのもなんだし、とりあえずお礼を言って引き下がる。

チケットを買った伊勢谷とまたエレベーターで下までおりて、食堂街を歩いた。週末のご飯時でどこも結構混んでいたから、入ったのは結局ファストフードだ。

そのときの食事代はわたしが払った。伊勢谷は渋ったけれど、二人分を払ってもプラネタリウムのチケット代には及ばない。

当たり障りのない会話をしながらハンバーガーを食べ、開始二十分ほど前に店をでた。エレベーターに乗りまた屋上に上がる。プラネタリウムの前には、すでに列ができていた。

「この時間でも、結構混んでるのね」  
「だな」

金曜日の夜ということもあるのか、ほぼカップルだった。その中で、伊勢谷は平然とした顔をしていた。そのうち、女性の視線が彼に集まる。

もしかしたら、わたしと伊勢谷もそういう風に見られているのかしら？

——あるわけないか。

一瞬でもそう考えた自分に、我ながら呆れてしまう。

同じ仕事をしているのに、仕事帰りてくたびれているわたしと違い、伊勢谷は雑誌から抜け出て来たようにキラキラしていた。

どう考えても、わたしと彼はつりあわない——

その事実は、思った以上にわたしの心にぐざりと刺さった。

開演十分前に扉が開き、列が動きだす。伊勢谷はさっさと歩いて、後方の真ん中に席を取ってくれた。

「実は俺も久しぶりなんだ。楽しみだな」

伊勢谷が椅子を倒したので、同じように座席を思いっきり倒す。ふと隣を見ると、間近に伊勢谷の顔があつて、凶らずもドキドキしてしまった。そんな自分に驚く。わたしは自身を誤魔化すように、あえて強気な調子で言った。

「さあ、思いっきり楽しむわよ！」

「ああ」

伊勢谷の低い笑い声を聞きながら、視線をスクリーンに移す。ほどなくして室内の明かりが落とされた。球状の画面にいくつかの広告が映されたあと、音楽とともに一面に星が光りだした。吸い込まれそうな漆黒の闇に、懐かしい天の川が浮かび上がる。

東京では見えない、無数の星。そして日本では見えない南十字星。宇宙から届く小さな光は、わたしの中で大きな力になる。

終わった後も、しばらくスクリーンを眺めていた。久しぶりに見た星。実物の方がいいのは当然だけど、それを見ることが難しい今の状態では、最上の星空だった。

ささくれていた心が落ち着いた。やはり、星を見ることはわたしにとって癒やしなのだ。

「大丈夫か？」

低い声がすぐ近くで聞こえたと同時に、伊勢谷がわたしの顔を覗き込んだ。伊勢谷の瞳の中に星が見えた気がして、思わずじっと見つめる。と、それは室内灯の光だと気づいた。

「あ、ごめん」

我に返って視線を外し、立ち上がる。軽くからだを伸ばし、出口に向かった。

「なんか、久しぶりに感動したな」

ビルをでて、駅に向かう途中で伊勢谷が言った。金曜日の夜だからまだまだ人が多い。人ごみを縫うように歩く伊勢谷に合わせる。

「そうね。本当にきれいだった。連れて来てくれてありがとう」

星を見たおかげで、いつになく素直にそう言えた。いつもと違う態度に驚いたのか、伊勢谷はわたしの顔をまじまじと見つめた。

「なによ？」

「いや。また行こうぜ。今度は別の場所にしような」

伊勢谷が笑顔になって言った。

『今度』という言葉に、次も二人で？ とか、なんでこいつと、とか思いながら、それでも頷いてしまった自分にまた驚く。そのとき、出しぬけに声をかけられた。

「やっぱり。伊勢谷くんと宮崎さんだ」

伊勢谷と並んで振り返ると、会社の同期の女の子が三人いた。飲み会の帰りだろうか。みんな少し顔が赤く、そしてハイテンションだ。

「やだ、二人してどうしたの？」

「仕事？」

……矢継ぎ早やつぎはやに聞かれたけど、ここで『デート？』と言われないのはなぜだろう？

「プラネタリウムに行つて来たんだ」

伊勢谷は平然と答える。

「えーっ、伊勢谷くんってそんな趣味があつたの!? ……どうして宮崎さんと？」

「ね、宮崎さん？」

彼女たちが目を見開き、一斉にわたしを見た。

いや、そんな目で見られても。

「天文部を作つたの。伊勢谷が」

その一環で……と言葉を濁にごす。

女の子たちは目を丸くして、今度は伊勢谷を見た。

「まあ、そういうこと。メンバーは今のところ俺と宮崎だけだけどな」

伊勢谷が苦笑いを浮かべて言う。

彼女たちは三人で顔を見合わせ、揃そろって頷いた。

「ねえ、わたしたちも入れてよ。大勢の方が楽しいでしょ？」

大勢でプラネタリウムを見てどうすんのよ。そんなただの遠足じゃない——。そう思ったけれど、とても言える雰囲気ではない。

しかも、彼女たちは伊勢谷ではなく、わたしに聞いて来た。こんな視線を一斉に浴びて、ここでNOと言える人間がいたらぜひともお目にかかりたい。

「もちろん」

なんとか頷くと、彼女たちは「やったー」と声を上げて喜んだ。伊勢谷が少しだけ肩をすくめた気がしたけど、そうしたいのはわたしの方だ。

「じゃあ、今度さ——」

彼女たちが伊勢谷に今後の提案を始めるのを、わたしは冷めた目で見ていた。

伊勢谷のまんざらでもないような応対に、誰でもよかつたんじゃないの？ という思いがわきお

こる。一緒に遊んでくれるなら、誰でも。

みんな一緒に駅に向かい、一人路線が違うわたしだけが別の改札に向かう。

「またな」

別れ際に伊勢谷が言った。手を上げてそれに応え、楽しげな女の子たちの声を聞きながら、わたしは人ごみに紛れた。

その後、伊勢谷が作った「星を見る会」は同期、先輩を含めあつという間に人数が増えていった。何か所かプラネタリウムを見て回ったけれど、やっぱり大勢で活動するのは難しく、それぞれの仕事も忙しくなって来たこともあつて、いつの間にか会は立ち消えた。

その間に、伊勢谷はどんどん成績を伸ばし、入社三年目には営業成績のトップに立っていた。伊勢谷はますます輝く星になり、わたしとの距離はひらく一方だ。

星が好き、というのは決して恥ずかしいことではない。だけどなぜか、伊勢谷に知られたことが嫌だった。都会になじまず苦労している、と思われそうで……

なんてのは、わたしの勝手な思い込みだろうか。

### 3

あつという間に週が明け、月曜日。

ダラダラ過ごした週末のおかげで疲れは取れたけど、やっぱりすつきりはしていない。こんなときは、星を見るに限る。きつかけが伊勢谷というのが気に入らないけれど、実はあれ以降、わたしはたびたび一人でプラネタリウムに行っている。映しだされたものとはいえ、やはり和むものは和むのだ。

週明け早々だけど、帰りにプラネタリウムに寄って帰ろうと決意して、わたしは通勤電車をおりた。会社への道を歩き、沢山のひとともに巨大なオフィスビルに吸い込まれるように入る。会社は十階と十一階のフロアにあつて、営業部は十階だ。エレベーターをおりると、ホールに置かれたショーウィンドウに自社製品がずらりと並んでいる。

そこには、女性向けの可愛い雑貨が新しく追加されていた。それらをひとつひとつ見ながら、担当している店舗のディスプレイを考える。営業先の商品の陳列も、わたしの仕事のひとつだ。効果的に並べてもらうよう、店側にアドバイスをすることもある。

受付を通って、一番手前にある営業部の部屋の扉を開けた。そこはまだ薄暗く、誰も来ていないようだ。部屋の電気と暖房をつけて自分の席に向かう。鞆を机の下に置いて、パソコンの電源を入れた。立ち上がる間に、給湯室の湯沸しポットに水を入れてセットする。

ふと、部屋の壁を見た。諸々のスケジュール表の隣に貼りだされているのは、後期の営業成績表だ。凸凹した棒グラフの中で、常に群を抜いて高いのは伊勢谷。わたしはその中で二番手にいるけれど、伊勢谷との差は大きい。それはここ数年間、ほぼ変わらない。

でも、それももう終わるはず。わたしが夏ごろから営業をかけている案件が、ここに来てようや



くまとまりつつある。本契約となれば、かなりの大口になる予定だ。そうすれば、わたしと伊勢谷の差はなくなる。いや、確実に追い抜ける。ライバルだと定めて六年目にしてようやく、ヤツの上に立つことができるのだ！

「今に見てなさい！」

グツとこぶしを握り席に戻ると、それとほぼ同時に、伊勢谷が出社した。

「おはよ。今日も早いな、宮崎」

わたしの隣の席にどかつと座る。なぜか、伊勢谷とわたしの席は隣同士のまんまだった。

「おはよう」

一応返事をしてメールチェックをする。とりあえず急ぎの用事はなさそうだと息を吐いたとき、クスツと笑い声がした。思わず眉を寄せて隣を見ると、やっぱり、伊勢谷がニヤニヤしてわたしを見ていた。にやけた顔なのに、なまじ整っているせいでそう見えないのが腹が立つ。

「なによ？」

「別に。月曜の朝から難しい顔してんなって思ってた。そろそろしわが目立つ年ごろなんだから、気をつけるよ」

「うるさいわね！ ほっといてよ」

誰のせいだと思いつつ、叩くようにキーボードを打つて必要なメールの返事をする。伊勢谷が笑いながらパソコンの電源を入れ、同じようにメールチェックを始めた。

「週末はちゃんと休めたか？」

パソコンに顔を向けたまま、伊勢谷が言った。

「おかげさまで。ダラダラ過ごして、二日間を無駄にしたわ」

わたしもヤツの方を見ないまま答える。

「無駄じゃないだろ。本当に必要だからそうしてるってだけで」

思わず手が止まった。こういうとき、伊勢谷は意地悪なのか優しいのかわからなくなる。

ムカつくことに、伊勢谷は入社したころと変わらず、今でも腹が立つくらいいい男だ。相変わらず女性には呆れるほどモテるけれど、未だ恋人はいないと本人が公言している。

いないはずはないと思うので、多分隠しているのだろう。その証拠に、用事があるとかで飲み会に参加しないことが多々あった。

恋人の話を彼に振らないのは、自分にもその反動が来るからだ。わたしの恋愛事情につっこまれると困ってしまう。

学生時代に少しの間つきあっていた人はいたけれど、就職してからはいない。

配属当時に指導してくれた営業部の先輩に告白されたことがあったけれど、そのときは伊勢谷に負けないように仕事するのに精一杯で、余裕がなくて、結局お断りしてしまった。とてもいい人だったし、優しくもしてくれていたから、断るのは心苦しかった。それからも指導係であることは続いていたので、色々気まずかったこともあり、しばらくして彼が転勤になったときは、正直ホツとした。恋人も作らず仕事に没頭していると、時々寂しくなる。でも今の自分にはこれが精一杯だ。

そんな現実を彼に言うことなんて絶対にできない。

もやもやしている間に、他の社員がぞくぞくと出勤して来た。

「おはよう」

「おはようございます！」

全員が揃ったところで営業部の及川課長おいかわが月曜日恒例の朝礼を始めた。

及川課長は一見のほほんとした普通のおじさんに見えるけれど、実はかなりのやり手営業マンだ。新人だった伊勢谷を指導した人でもある。あのあと、着実に昇進して、今では営業課長だ。

短い朝礼が終わり、わたしは外回りに持つていく資料やサンプルを揃え、紙袋に詰め込んだ。立ち上がって、椅子の背もたれにかけてあったコートを着ると、同時に伊勢谷も立ち上がった。営業車の鍵を手に、エレベーターに向かうタイミングも同じ。

ビルの地下にある駐車場で、空気が冷たくて思わず身震いする。そろそろマフラーが欲しい。

「また一段と寒くなって来たな」

眉間に少しだけしわを寄せ、隣に立っていた伊勢谷が言った。

「やるよ。お互いに頑張ろうぜ」

いつの間にか買ったのか、伊勢谷から温かい缶コーヒーを渡された。

「ぜーったい負けないもんね！」

颯爽さつそうと車に向かつて歩きだした伊勢谷の背中に向かつて思いつきり舌をだすと、背を向けたまま伊勢谷が手を上げた。どうやら聞こえたみたいだ。温かい缶コーヒーを握りしめ、冷たい空気をいっぱい吸い込み、わたしも自分の車に向かった。

営業は電車で行くこともあれば、車で回ることもある。都内の運転は最初は緊張したけれど、今では慣れたものだ。午前中は現在商品を置いてもらっている店舗を回り、新商品のパンフレットとサンプルを配った。お昼は手近なファストフードですませ、また車を運転して本命の会社へ向かう。目指すのは、私鉄の本社ビルだ。

最初に営業をかけたのは、駅の構内にある小さな雑貨屋だった。ちょうどそのころ、その私鉄全線で大がかりな駅ビルの再開発が決定していて、タイミングよくその担当者に引き合わせてもらったのだ。ここまでの手ごたえは悪くない。うまくいけば、今後主要な駅すべてに建設される駅ビルの店舗に、商品を置くことができる。

この契約がまとまれば、間違いなく営業部内でトップに立てる。

来客用の駐車場に車を停め、深呼吸して入り口をくぐる。受付で担当者の名前を告げると、すぐに会議室に案内された。そこで持って来た資料を取りだしていたら、中年の男性が入って来た。担当の後藤ごとうさんだ。

「今日は冷えますね」

後藤さんは片手に書類を抱え、飲み物の入ったカップを乗せたお盆を持ったまま、部屋の空調を調節した。

慌てて駆け寄り、お盆を受け取る。

「ああ、すみません」

へへっと笑うと、人のよさそうな笑顔になる。

後藤さんはうちの及川課長と同年代の穏やかな人だ。だけど駅ビルのテナント関係を総括している部署の偉い人だから、やり手なのだろう。

「お忙しい中、お時間をいただきありがとうございます」

「こちらこそ、何度も足を運んでいただいて」

どうぞ、と温かい珈琲コヒーを勧められ、一口飲む。それから、持って来た書類を広げた。

現在の売れ筋と駅を利用する購買層の関係、雑貨店の必要性と店舗のイメージなど、なるべくわかりやすく説明した。

後藤さんは資料を丁寧に見て、うんうんと頷いてくれている。

「この資料とイメージはいいですね。上の方々にもわかりやすい」

「ありがとうございます」

こう言ってもらえると、残業して作った甲斐かひがあったというもの。

後藤さんがわたしを見てにこりと笑った。

「明日の午前中に会議がありますね。この資料を提示したいと思います。何事もなければ、そこで正式に決定します」

「は、はい」

ああ、いよいよだ。緊張のあまり、ごくんと唾を呑み込んだ。そんなわたしを見て、後藤さんがまた笑う。

「宮崎さんが熱心に通ってくださいだったので、ぼくも心してプレゼンしますよ」

「よろしく願います！」

膝に置いていた手をぎゅっと握り、机に頭がつきそうなくらい、礼をした。

「まだ決定ではないんですけどね」

後藤さんがそう言って、目の前に書類を広げた。

「各ビルに雑貨と文具のテナントを入れる予定なんです。宮崎さんのところには、この内の約四分の一のスペースをお願いしたいと思っています。場所によって規模や内容も異なると思うので、それに合わせた商品展開を今のうちから考えておいていただきたい」

まだ決まっていなから急がなくていいですよ——後藤さんは笑ってそうつけ加えた。

渡された書類には、各店舗の大よその広さの一覧が書かれている。一度にこれだけの数の店舗を扱うのは初めてだ。

こんなにわくわくするのは何年ぶりだろう。これが決まれば寝る暇もないくらい忙しくなるだろうけど、早く手をつけたくてたまらなくなった。

「では、明日決まり次第ご連絡します」

「はい。どうぞよろしく願います」

深く頭を下げる。

営業先をでてからも、まだ夢心地だった。足取りも軽く会社に戻ると、営業部からわーっという声が聞こえた。

そっとドアを開けると、課長の机のそばに人が集まっている。在社している営業部のメンバーだ。

課長の前には伊勢谷がいた。この光景は何度も見たことがある。

「すげーな、伊勢谷！ 今月で二件目だぞ、新規の店舗」

ああ、やっぱり。また伊勢谷が契約を取って来たようだ。

うれしそうな及川課長やみんなの顔を見ると、胸がぎゅっと痛くなった。こんな嫉妬心は捨てるべきだと、もう何年も思っているのに、まだ捨てられない。

自分の机に鞆かばんを置き、後藤さんから渡された書類を取りだす。わたしにはわたしの仕事がある。初めて、伊勢谷を追い越せるかもしれないのだ。そう思うと、また胸がわくわくして来た。

「よお、お疲れ」

顔を向けると伊勢谷がいた。まあ隣の席なので当然だけれど。

「お疲れ様、それからおめでとう」

ここで祝えないほど子どもでもない、はずだ。わたしは平静を装って言う。

「ありがとう」

伊勢谷はちよつと笑い、椅子に座った。彼はいつでも大げさに喜んだりはしない。それが余計に気に障る。わたしだったら、きつと小躍りしちゃうわよ。

そんなことを胸の中で思いつつ、次はわたしだと、書類を持って課長のもとに行った。

「おお、戻ったか。どうだった？」

「最終決定は明日の会議だそうですが、ほぼいけるかと」

さっきの書類を見せつつ後藤さんから言われたことを伝えると、及川課長が眉を上げた。

「これは、かなりの規模になりそうだな」

そして、わたしを見てニヤリと笑う。

「伊勢谷の鼻を明かすときが来たようだ」

ささやくような小さな声に、わたしもニヤリと頷き返す。

「決まり次第教えてくれ。本契約には同行する」

「はい！」

書類を受け取り、なんにもなかったような顔をして自分の席に戻った。決まるまでは内緒にした。そして決まった瞬間には、伊勢谷の目の前で小躍りどころか飛び上がって喜んでやるつもりだ。伊勢谷の驚く顔が目に浮かぶ。にやけているのがばれないように気をつけながら黙々と資料を作っている、いつの間にか定時を過ぎていた。

おっと、今日は早めに終わらせようと思っていたのに。

ファイルを保存して一息ついたところで、肩をぽんと叩かれた。振り返ると一美が立っている。

今日は首を絞められなかったようだ。——よかった。

「お疲れ、奈央。今からみんなでご飯食べに行くんだけど、一緒に行かない？ 月曜日だけ特別メニューをだす店があるんだって。ちなみに合コンじゃないから。ねえ、伊勢谷も行こうよ」

一美は隣の伊勢谷にも声をかけた。

ヤツが行くなら行きたくないし、それにそもそも、今夜は星を見ようと朝から決めていたのだ。

「あーごめん、今日はちよつと」

断ると一美がえーつと声を上げた。

「ほんとに合コンじゃないのよ？ 普通の食事だけ」

一美が言葉をかさねる。そこまで合コンの件を根に持っているわけじゃないのに。

「ごめん、用があるのよ」

「宮崎は一人で飲む方がいいんだろ」

もう一度断ったとほぼ同時に、伊勢谷がからかうように言った。いちいちムカつく男だ。

「一人で飲みなんて行かないわよ。用事よ、用事！」

元々お酒は苦手で、同期の飲み会すらほとんど参加しないのに、人聞きの悪いことを言わないでもらいたい。一人で飲みに行くような女だと、伊勢谷は思っているんだろうか。そう考えると、なぜか胸がチクリとした。

「そう。じゃあ、残念だけどまたね。伊勢谷も来られるなら連絡して」

一美はそう言うと、ドアから出て行った。

最後のメールチェックをしてパソコンを落としたのち、立ち上がってコートを羽織る。

「お先〜」

隣でまだキーボードを叩いている伊勢谷に声をかけると、ヤツが顔を上げ、それから手を上げた。

「おー。お疲れ。一人で飲みすぎんなよ」

「だから、飲まないって言ってるの」

ケラケラ笑う伊勢谷を無視して、会社をあとにした。気が立っているからか、寒さもそんなに気

にならない。

駅までの道を足早に歩き、家に帰るのは別の路線に乗る。目指すのは奇しくも伊勢谷に最初に連れて行ってもらったプラネタリウムだ。そこが時間的にも場所的にも一番行きやすかったのだ。

月曜の夜でも大勢の人がいる街で、人の流れに乗って、大きなビルに向かう。時間や空席情報はスマートフォンでチェックし、すでに予約済みだ。六年で随分便利になったものだ。先にさっさと食事をすませ、専用のエレベーターに乗った。

屋上でおり、プラネタリウムの入り口に向かう。「いらつしやいませ。記念品をどうぞ」

スマホの画面を見せて入場すると、ちょうどプログラムが変わった時期らしく、記念のロゴと北斗七星をかたどったキーホルダーをもらった。

開場と同時に中に入る。席は後方の真ん中の、一番いい席だ。

グッと背もたれを倒し、球状のスクリーンを見上げる。室内が徐々に暗くなり、スクリーンに映像が浮かび上がる。

そのとき、ふと「星を見る会」のことを思い出した。一時は大勢参加していたけれど、今ではもう誰も存在すら覚えていないだろう、あの集まり。元々伊勢谷目当てで集まった女子ばかりだったから、彼が声を上げない限り誰も集まらない。

それにしてもあのとき、どうして伊勢谷はわたしを誘ったんだろう。プラネタリウムの存在を教えてください。それは感謝している。それだけでよかったのに、どうしてわざわざ一緒に星を見に行つ

たの？

音楽が流れ、スクリーンの夜空に星々が浮かび上がる。

「あ……」

その中に、小さな星の塊かたまりを見つけた。すばるだ。伊勢谷の名前、伊勢谷の星。

すばるとともに、目の前の巨大なスクリーンに満天の星が映しだされた。子どものころから見慣れた暗黒の夜空――

スクリーンの星を、目に焼きつけた。

まだ頑張れる。大きな仕事もきつと決まる。これでわたしも、輝ける星になれるだろう。

待つてなさいよ、伊勢谷！

4

きれいな星をたつぷりと見たおかげか、翌朝は目覚ましが鳴る前にすっきりと目が覚めた。久しぶりに時間をかけて朝食をとり、身支度を整える。

鞆たもとに、昨日もらったキーホルダーをつけてみた。飾り気のない黒い通勤鞆に、小さな北斗七星が揺れる。

「可愛いじゃない」

まるで夜空に浮かんでいるかのようだ。

テレビの天気予報を眺め、気温を確認してクローゼットの衣装ケースからマフラーを取り出した。まだ十二月になっていないけれど、例年より気温が低くコートだけでは寒さは防げない。コートの上からしっかりとマフラーを巻き、少し可愛らしくなった鞆を肩にかけて家をでた。

会社のビルの入り口に来たとき、背後から肩を叩かれる。また一美かと振り返ると、伊勢谷がいた。わたしと同じように、首にマフラーをぐるぐる巻きにしている。

「おはよ」

「おはよう」

他の会社の女の子たちが伊勢谷をちらちら見ているのを横目に、エレベーターホールに向かう。

「昨日は飲み過ぎなかったか？」

マフラーを少し緩めて伊勢谷が言った。

「だから飲まないって言ってるでしょ！ だいたい、飲んだのはあんたじゃない」

「俺、行かなかったし」

「あら。……そう」

なぜかホツとしている自分に、自分で驚く。

社交的な伊勢谷だけど、実のところ夜のつきあいは悪いのだ。それは社内ではよく知られたことだ。とはいえわたしには関係ないと、鞆を抱え直す。北斗七星がカチャリと音を立てて揺れたとたん、伊勢谷が声をあげた。

「それ……プラネタリウムに行ったのか？ ……もしかしてデートか？！」  
わざとらしく驚く伊勢谷をギッと睨む。

「まさか。一人に決まってるでしょっ！」

自分で言っていて悲しくなるセリフだ。だけど伊勢谷は、そんなわたしの内心に構うことなく満面の笑みで頷いた。

「だよな」

「はあ？ だよなっでなによっ」

「だって、お前、男っ気が皆無じゃん」

「あんたっで本当に失礼な男ね。ほっときなさいよ！」

「俺がほっといたら、構ってくれる男が誰一人いなくなるだろ」

「なっ……」

一瞬あつげにとられ、反論しようと思っただころでエレベーターのドアが開いた。満員電車並みに詰め込まれ、伊勢谷と向かい合っで抱きあうような体勢になってしまった。わたしと伊勢谷の距離はほぼほに等しい。ドキドキしてしまっただのは、怒りのせいに違いない。妙に速く動く心臓の音まで聞かれてしまっそうだ。伊勢谷のコートのボタンを睨みながら、そのドキドキを誤魔化そうと頭の中で毒づいた。

どうせ長らくカレンなんていないわよ。でもあんただっで相手がいないのは同じじゃない。まあ、隠してるのかもしれないけど。だいたいプラネタリウムだっで、一緒に行こうっで誘ったくせに、

勝手に行かなくなっただのはあんたじゃないの。

——ああ嫌だ。これじゃあわたしが、伊勢谷と一緒に行きたがっでるみたいじゃない。

思わず頭を振っただら、頭上から伊勢谷の低い声がした。

「動くなよ、くすぐりたいだろ」

腹が立つのでさらに振っでやっただ。すると伊勢谷が、フンと鼻を鳴らして笑う。そしてヤツのあごがわたしの頭頂部に乗り、その重みで動きを封じられた。

「ちょ、ちよっとうっ」

「つむじにあごが刺さっでる！ 痛い！」

からだを引こうっとしても、乗っでている頭がさらに重くなっでそれもかなわない。ますます腹が立つて来て、抗議しようっで思っただところっでドアが開いた。伊勢谷に腕を掴まれ、満員のエレベーターから抜けだす。

「ちよっとう、痛いじゃない！」

「お前が動くからだろ。こっちだっで身動きが取れないんだっでっの」

伊勢谷は悪びれる風もなく、さっさと歩きだした。その後ろ姿を睨みながら、まだ少し感觸の残る頭頂部に手を当てる。

なんなのよ、もう。

今ごろ、私鉄本社では例の会議が行われているはずだ。気になるけれど、わたしの仕事はそれだ

けではないので、すぐに外回りにでた。決して伊勢谷と顔を合わせづらいわけじゃない。

三件目の訪問を終えて一息ついたとき、靴の中のスマホが震えた。慌てて取りだす。相手先を確認して、心臓の動きが一気に速くなった。

「は、はい。宮崎です」

『後藤です。早い方がいいと思ったので。今会議が終わりましてね、この前お話しした通りお願いしたいと思います』

「あ、ありがとうございます！」

『いえいえ。契約書の件で一度きちんと話をさせて下さい』

「わかりました。上司と伺いたいと思いますので、後藤さんのご都合のいい日程を教えてくださいますか。今出先ですので、再度ご連絡させてください」

震える指で鞆を探り、メモ帳とペンを取りだす。すぐ横の建物にメモ帳を押し当て、電話越しに告げられた日程をメモした。

「ありがとうございます。では、折り返しご連絡いたしますので。失礼します」

電話を切ってもまだドキドキしていた。初めて契約を取れたとき以上に、気分が高揚しているのがわかる。震えている指で、会社の電話番号を押す。

及川課長と話すときには少し落ちついてはいたけれど、声はいつもより上ずっていた。

「か、課長、例の駅ビル。決まりました」

『そうか、よくやった』

電話の向こうで、課長の笑う顔が見えた気がした。

「契約書の件で先方と話をしたいので、課長と一緒に行って頂きたいのですが」

先方の都合のいい日を告げ、課長の予定を伺う。

「では、金曜日の午後ということで、先方に伝えておきます。よろしくお願いします」

すぐに後藤さんに連絡して、アポイントを取り、ようやく人心地ついた。

顔がにやけるのを止められない。最後の営業先を回り、会社に戻って来ても、その笑みは消えなかった。

営業部のドアを開けると同時に歓声が響いた。

「すごいじゃないか！ さすがは宮崎！」

「でかしたぞ！」

その場にいた全員が拍手をして迎えてくれた。同じ光景を何度も見た。でもそのとき拍手が向けられているのは、ずっとわたしじゃなかった。そう、入社以来、ずっと。

急かされるようにして課長の前にでると、及川課長が右手を差し出した。

「改めて、よくやったな、宮崎」

「あ、ありがとうございます！」

その手を握り返すと、周りでまた拍手が沸きおこる。

みんなからお祝いの言葉をもらい、興奮冷めやらぬまま自分の席に着いた。鞆から書類をだしながら、ふと壁に貼ってある成績表を見る。今回の契約のおおよその売り上げと、今の伊勢谷との差



をざっと計算して、思わずにんまりした。確実にヤツの成績を超える。入社してから六年間、ずっと抜けなかった伊勢谷を、初めて超えることができるのだ。

ウキウキしながら書類を整理し、企画室の担当者のところに向かう。打ち合わせをして、金曜日までに追加資料の作成を頼んで戻って来ると、外回りを終えた伊勢谷が机に座っていた。

「よお。駅ビルの契約決まったんだって。おめでとう」

わたしの顔を見て、伊勢谷が笑う。悔しさや嫉妬しつとといったマイナスの感情は、まったく見られない。心から喜んでいるように見えた。

わたしの競争心は常に空回りしている。それでも、うれしいものはうれしいのだ。

「ありがとう」

満面の笑みを返すと、伊勢谷が珍しそうな顔でわたしを見た。いつもほぼ仏頂面なので、驚いているようだ。わたしだって笑うときは笑うのだよ、伊勢谷くん。

彼の表情に満足して、今日の報告書を作成する。

定時を過ぎ、最後のメールチェックを終えてパソコンの電源を切ると、伊勢谷がこつちを見て言った。

「今日はもう終わりか？ 飲みに行こうぜ、祝杯を上げてやるよ」

「え、いいわよ。別に」

「遠慮すんなよ、奢ちかってやるから」

伊勢谷はそう言うと、さっさと帰り支度を始めた。

「ほら、行くぞ」

急せぎ立てるようにわたしを促うながす。

「なんでよ!？」

「いいから。たまにはつきあえよ」

半ば強引に連れだされ、引きずられるようにして駅近くの居酒屋に入った。伊勢谷と、しかも二人だけで。

テーブルにつくなり、これまた急かされるまま、ビールを頼み、料理を選ぶ。

「新規契約、おめでとう」

すぐに来たビールで乾杯する。久しぶりに飲むそれはやけに苦く、思わず顔をしかめた。そんなわたしを伊勢谷が笑う。いつの間にかテーブルいっぱい料理の皿が並び、ついでに伊勢谷がチューハイを追加注文した。

「こつちの方が飲みやすいだろ」

そう言って、新しいグラスをわたしの前に置き、まだ半分以上残っているビールジョッキを自分の方に引き寄せた。

「え、飲むわよ」

「無理すんな。酒はおいしく飲んだ方がいいだろ」

そう言われたら遠慮はしない。料理を食べながら、少し甘くてさっぱりとしたチューハイをぐいぐい飲んだ。

「本当によくやったな。宮崎」

わたしの残したビールを飲みつつ、伊勢谷が言った。

「まあね。この契約に懸けてるところがあったし」

少しふわふわして来た頭で答える。普段お酒を飲まないからか、あまり飲んでないのに回りが早い。「そうなのか？」

「そりやそうよ、ようやくあんたを追い越せるチャンスなんだから！ やつとわたしの実力を認めさせることができるわ」

伊勢谷がまた目を見開いた。今日はヤツの驚く顔を何度も見ている。本当に幸せな気分だ。まあ、余計なことを言ったような気もしないではないが。

「宮崎は優秀だと思ってるよ、ずっと」

腑に落ちない顔のまま伊勢谷が言う。

「わたしが優秀なのはわかってるわよっ」

女性営業マンの中では一番だし、営業成績は常に上位だ。だけど、いつもあと一歩というところ  
で伊勢谷に及ばない。だからこそ余計に悔しいのだ。

それなのに、伊勢谷本人にはそう思われていたなんて。

「わたしはね、ずっと優等生で通ってたの。ずーっと一番だった」

「島で？」

伊勢谷が笑う。ちよつと嫌味っぽい気もしないでもないけど、気にしない。今日は気分がいいから。

「そう。だから両親が東京にだしてくれたのよ。東京の方がいい大学も仕事もあるからって。わたしは、実家を手伝ってもよかったのに」

そうだ。もともとは、自分で上京を望んだわけじゃない。小さいころからずっと民宿を経営する両親を見て来て、自分も大きくなったらお手伝いをするのだと漠然と思っていた。なのに今、わたしは遠く離れた東京で、ライバルとこうしてお酒を飲んでる。

「手伝うって、実家はなにか商売を？」

「民宿よ。目の前が海水浴場だね。近くには温泉もあるから、一年中そこそこ観光客が来るの。ゆったりした時間が流れる素敵などころ。今は兄夫婦が手伝っていて、両親はそれほど苦労はしてないと思う」

二杯目のチューハイに口をつけ、枝豆を摘む。

「星がね、すごくきれいに見えるの。夜の砂浜で星を見上げると吸い込まれそうになって、自分が星のひとつになったみたいに思えて。嫌なことも、星を見ると忘れられる」

「嫌なことがあったのか？ 昨日、行ったんだろ。プラネタリウム」

飲んでいるくせに、頭の回転の速い男だ。

「嫌なことじゃないわ、多分。……実家から荷物が届いたの。時々送ってくれるのよ、食料品とかを。ありがたいし、手紙もうれしい。でもね、母はいつも頑張ってるって言うの。奈央はお母さんの誇りだから頑張ってる、って」

グラスの中の細かい泡をじっと見つめた。母の期待は、時々すごく重い。

「わたしは、ずっと頑張ってる」  
「そうだな」

伊勢谷がまた静かに言った。顔を上げると、妙に優しい目でわたしを見ている。  
「これでやっと、仕事で一番になれたってお母さんに言えるの」  
「ああ」

伊勢谷が、自分のグラスをわたしのグラスに合わせた。

「だから、こうして祝ってる」

言葉と同時にカチンと小さな音が鳴る。

「おめでとう」

「……ありがとう」

胸の中がじんわりと温かくなって来た。それがお酒のせいなのか、なぜか優しい伊勢谷のせいなのか、考えようとしてもうまく頭が回らない。でも、久しぶりにとても気分がよくて、ずっと天敵だと思っていた伊勢谷とも、やけに楽しく会話ができた。

お腹がいっぱいになったところで店をでて、駅までの道を歩きながら空を見上げた。冬の澄んだ夜空に、いくつかの星が見える。

「ほら、オリオン座がある。左の少し赤く見えるのがベテルギウス」

わたしが空を指差すと、伊勢谷もそれを見上げた。

「シリウス、リゲル、プロキオン。並んでるふたご星はカストルとポルククス」

「へえ。よく知ってるなあ」

次々と歌うように指差せば、感心した口調で伊勢谷がつぶやく。

「だって、すごく好きなのよ」

「みただいな」

ご機嫌なわたしを見て、伊勢谷が笑う。

駅で伊勢谷と別れ、いい気分のまま電車に乗った。最寄り駅でおりて、自宅までの道を歩く。

なんだか今日は、色々個人的なことを話してしまった気がする。酔っ払いの戯言だと、聞き流してくれていればいいけど。

また空を見上げると、さつき伊勢谷と見たオリオン座がキラキラと輝いていた。

5

金曜日まで、割ける時間をすべて資料作りに費やした。契約が決まったからといって、手は抜けない。契約書を交わしていない以上、まだ確約ではないのだ。

伊勢谷はあの翌日から、特に変わったところはない。少し話し過ぎたかと心配だったので、拍子抜けしたくらいだ。

それでも、面と向かって顔を合わせるのはなんだか照れくさくて、忙しさを理由に、伊勢谷と接

触しないよう、ひたすら資料作成や打ち合わせを繰り返した。

「奈央！　すごく大きい契約が取れたんだって？　総務でも大騒ぎよ。おめでどう！」

総務に顔をだしたとき、一美に呼び止められた。飛びついて来る一美を反射的に受け止める。

「まだ本契約前よ」

一応そう答えると、一美が笑った。

「なに言ってるの。決まったも同然でしょ？」

「まあね」

「やったじゃない。さすがは奈央だわ。友人として鼻が高いわよ」

「大げさね」

たしなめつつも、改めてうれしさが込み上げて来る。

「近いうちにお祝いしてあげるから、今度こそ予定空けといてよ」

お誘いを立て続けに断ったことを、やっぱり根に持っているようだ。

「わかったわ」

苦笑いで一美に頷き、足取りも軽く仕事に戻った。

約束の日時に、及川課長とともに私鉄の本社に向かう。打ち合わせは終始和やかに進んだ。タイ

プの似ている課長と後藤さんは、やはり気が合うようだ。

仮契約書の細かい部分を話し合い、資料を渡した。

「では、本契約書ができ次第ご連絡します。これ以降のやりとりは新たな担当者が行いますので、

次回ご紹介させていただきます」

「こちらこそよろしくお願いたします」

後藤さんと次の約束をし、外にでたときにはすっかり日が暮れていた。会社に戻る道すがら、及

川課長が言った。

「時期は多少ずれるとはいえ、この規模は一人では厳しいな。補佐をつけて、エリアごとに担当者

を増やすか」

「そう、ですな」

自分が取った仕事だから、できれば一人でやりたい。でも現実問題として、この規模のものにな

ると一人では無理だ。

「今回の打ち合わせまでに決めておく。——そんな顔するなよ。もちろん、指揮は宮崎が執るんだよ」

「はい」

わたしの気持ちが顔にでていたのか、及川課長がこつちを見て笑った。

「今年はいいい正月を迎えられそうだな。おっとその前にクリスマスか。プレゼントは奮発してもら

えよ」

「くれる人なんていませんよ」

もう何年も、プレゼントなんてもらったことはないのだ。悲しいけれど。

「今年はわからんよ」

及川課長が暢気に言う。